

花嫁のれんと親族関係について

堀田 真由

(手塚ゼミ)

目次

はじめに
第一章 モノとしての花嫁のれん
第一節 花嫁のれんとは
第二節 花嫁のれんの普及
第三節 花嫁のれんの分布
第四節 加賀・中能登と奥能登の民俗地域差
第二章 通過儀礼の中の花嫁のれん
第一節 通過儀礼の中の結婚
第二節 境界状態と花嫁
第三節 境界をくぐる・またぐ行為
第四節 嫁入りの流れとその他の習俗 (七尾市を事例に)
第三章 花嫁のれんと親族関係
第一節 婚入者と家
第二節 七尾市での事例
第三節 白山市での事例
第四節 持参財としての花嫁のれん
第四章 花嫁のれんの変容
第一節 儀礼文化と変容
第二節 一本杉に残る花嫁のれん
第三節 イベント化する花嫁のれん
おわりに
参考文献
図表

はじめに

この卒業論文のテーマである花嫁のれんは、北陸（主に石川県）のみにしか見られない風習である。私が、花嫁のれんに出会ったのは、小学校低学年の頃である。その時初めて、親戚の結婚式を見に行った。花嫁が、婚家入りする際、玄関を入ってすぐの入口に、赤いグラデーションに鳥が二羽と、桜の木が描かれた、とても美しいのれんが下

げられており、それが強く印象に残っている。しかし、花嫁がそののれんをくぐった先で何が行われていたのか、こののれんをくぐる意味は何なのか、その時は、全く知らなかった。そんな時、ドラマ「花嫁のれん」の放送が開始され、そこで初めて、花嫁のれんが北陸の伝統的な、婚姻儀礼である事を知った。また、ドラマの中に描かれた嫁姑関係は壮絶で、自分が嫁ぐ際には、その様な問題に直面したくないと感じた。ひとつののれんが、人間関係にどれほどの影響を与えるのだろうか。この論文では、花嫁のれんという慣習の背景にある、人々の心理や、動機をフィールドワークから考察し、花嫁のれんを用いた婚姻後の婚家と花嫁の関係から、花嫁のれんが持つ機能、親族関係に与える影響について、明らかにしていく事を目的とする。

第一章 モノとしての花嫁のれん

第一節 花嫁のれんとは

花嫁のれんとは、格式ばった婚礼の際に、花嫁が持参する北陸伝統の嫁入り道具の一つである。旧加賀藩であった能登、加賀、越中に根付いた独自の風習であり、民衆に受け継がれた。婚礼の日に、花婿の家の仏間の入口に掛け、両家の挨拶を



【図1】花嫁のれんくぐり

交わした後、玄関先で実家と嫁ぎ先の水を半分ずつ混ぜて飲み干し、花嫁のれんをくぐり、先祖の仏前に手を合わせ、「どうぞよろしくお願ひします。」とお参りしてから結婚式が始まる。

嫁いでから数日は、新夫婦の寝室の入口に一週間掛けられる。その間、親戚の女性たちが嫁入り道具を見に訪れ、祝いの膳を囲んで、夫婦の行く末を祝うという段取りである。外されたのれんは、タンスや長持ちに仕舞い込まれ、その後、取り出す事はほとんどない。

現在では、七尾市一本杉通りに色濃く残っている。一本杉通りとは、七尾市の中心部に位置し、600年以上の歴史を持つ。七尾駅前を流れる御祓川にかかる仙対橋から、御祓公民館までの街道で、450mほどの商家や民家が立ち並ぶ商店街である。



【図2】一本杉通り商店街

この一本杉通りでは、毎年花嫁のれん展が行われ、語り部によって花嫁のれん一枚にまつわる語りが披露される。その為、今回は一本杉通り商店街で働く女性を対象に、2014年（平成26年）10月24日に聞き取り調査を行った。また、私が住む白山市上安田町周辺の方々にも2015年（平成27）1月に聞き取り調査を行う事ができたので、能登地方の事例を七尾市一本杉通り、加賀地方の事例を白山市上安田町周辺とし、表にしたものである。表1、表2は、結婚式を挙げた年代順に並べたものである。表をみると出会いの形態が徐々に、お見合い婚から、恋愛婚へと変化している事がわかる。それに伴い、花嫁のれんを用いる有無や、使われ方も変化している事が分かる。特に表1の方では、現代風にアレンジされた花嫁のれんがみられるが、それについては第四章の花嫁のれんの変容で取り上げたい。この様に、変化がみられる花嫁のれんではあるが、もともとの伝統的な様式はどの様なものであったのだろうか。ここで取り上げる事例は、一般的に見られる花嫁のれん

を用いた伝統的婚姻儀礼の事例である。

【事例b】：1961年（昭和23年）金沢市から中能登町へ嫁いだ女性

「もともと、七尾市で生まれ育った。就職を期に、家族共々、金沢市へと引っ越した。しかし、生まれ育った七尾では、子供の頃から、どの家でもあたりまえの様に、花嫁のれんが用いられていた。その為、花嫁のれんの存在はよく知っていた。実際に用いた花嫁のれんは、実家の母が、知人の紹介の店で、注文し作ってくれた。結婚式以降は、いっさい出す事がなく、どこかの筆筒の奥に仕舞ったままで、今どうなっているのか分からない。のれんの柄は、記憶が曖昧ではあるが、薦の家紋に、鳥（ムクドリ？）が二羽、その周りに花が描かれていた。花嫁のれんをくぐった先には、お姑さんが待ちかまえており、嫁ぐ不安や怖さから、緊張しており、お姑さんの顔を見ることが出来なかった。のれんをくぐる際も緊張から、あまり記憶がない。その後、仏壇へ手を合わせ、お姑さんと隣の部屋へ移動した。親族が集まっており三々九度を行った。そして、全てが終わると、披露宴会場のホテルへと移動し、披露宴が行われた。」

【事例c】：1969年（昭和44年）七尾市から一本杉通りへ嫁いだ女性（当時65歳）

「花嫁のれんは、とても高価な物であると理解していた。その為、親にはいらないと言っていたが、七尾で育った人間なので、作らない訳にはいかなないと親が用意してくれた。花嫁のれんは、母がカタログから選んでくれた物で、ピンク色とオレンジ色のグラデーションが鮮やかな物であった。絵柄は、竹の葉であったと思う。現在は、親戚の結婚式や、知人の結婚式などに貸し出している際に、紛失してしまった。のれんくぐりは、仏間の入口だけではなく、勝手口にも掛けられた姑の花嫁のれんもくぐった。姑の物は、披露宴へと婚家を出る際には、取り外されていた。」

【事例a】：1935年（昭和10年）母が中能登町から七尾市へ嫁いだ男性（当時66歳）

「母が、花嫁のれんを用いた結婚式をあげている。母の話によると、のれんは金沢の友禅染で作られたものであり、絵柄は、花輪の家紋に、宝来山と架空の世界が描かれた物である。」

花嫁のれんと親族関係について

【表1 七尾市一本杉通りでの聞き取り】：2014年10月24日実施

	対象	結婚	出合い	生家	婚家	花嫁のれん	花嫁のれんへの思い	婚姻儀礼	誰がどこで作ったか
a	66歳男性の母親	1935年(昭和10年)	見合い	中能登町	七尾	花輪の家紋に宝来山	本人ではないので分からない	仏間以外にも寝室にかけてくぐった(初夜三日三晩式が続いた)	金沢で友禪を用いた
b	女性	1961年10月(昭和23年)	見合い	金沢市	中能登町	葛の家紋に鳥二羽、花	子供の頃から知っており、この辺ではあたりまえのこと	合わせ水→花嫁のれんをくぐる→仏前での挨拶→三々九度→披露宴(基本型)	実家の母、知人の紹介の店でオーダー
c	65歳女性	1969年(昭和44年)	見合い	七尾	七尾	花嫁のれん紛失、竹の葉、ピンクとオレンジのグラデーション	高価な物なのでいらないと云ったが、七尾で育った人間なので、親が用意してくれた、くぐる時は恥ずかしく、下を向いていたのであまり覚えていない	勝手口にかけられた姑の花嫁のれんと、仏間にかけてられた自分の花嫁のれんをくぐった 姑の物は帰る際には取り外されていた→その後和倉温泉で披露宴	カタログから母に選んでもらった
d	60歳女性	1975年(昭和50年)	恋愛	珠洲市	七尾	作っていない	花嫁のれんを知らなかったため用意しなかったが、婚家を用意しろと言っていたら用意していた	くぐっていない	作っていない
e	61歳女性	1977年(昭和52年)	恋愛	七尾	七尾	楼閣山水、住まいに不自由しないよう	くぐって仏壇へ入った時、鳥肌が立ち、いざくると覚悟が強くなった くぐった先に姑しかおらず、怖かった	(基本型)	婚家が呉服屋で、実家の親が婚家に頼みつける自ら口出しはしなかった
f	40代女性	2011年(平成23年)	恋愛	七尾	大阪	家紋だけ友禪染で着物など思い出の物を使った手作り	高価な物なので持っていない、しかし母の手作りであれば持っていく、本当に親の思いが込められた物	仏壇参りがないので、実家の仏間へ手を合わせのれんをくぐった	母の手作り
g	30代女性	×	恋愛	岩手県花巻	七尾	食堂にさげる様なレースの物を実家の母が用意	×	×	×
h	30代女性	×	恋愛	埼玉	七尾	×	息子さんが花嫁のれんの風習について説明しており、本人から使いたいと言ってきた	×	×
i	30代女性	×	恋愛	金沢	七尾	息子さんとお嫁さんが二人でデザインして染め作った物	婚家が呉服屋であったため、婚家の方から作って欲しいと言われ作った	×	自らデザインし作成

【表2 白山市上安田町周辺での聞き取り】：2015年1月実施

	対象	結婚	出合い	生家	婚家	花嫁のれん	花嫁のれんへの思い	婚姻儀礼	誰がどこで作ったか
j	78歳女性	1962年2月(昭和37年)	見合い	白山市	白山市	番の鳳凰	実家の親が用意してくれた。どこの家でも持って行くのがあたりまえだった。	合わせ水→花嫁のれんくぐる→仏前挨拶→三々九度→披露宴	実家の親が近所の呉服屋で作った
k	53歳女性	1977年(昭和52年)	恋愛	白山市小上町自営業	白山市上安田	朱色、鴛鴦が二羽描かれた物	当時は花嫁のれんの存在を知らなかった。実家の母が用意してくれたので用いた。高価なものという意識はあるが、あまり関心はない。娘が結婚する時は用意したい。	基本型	実家の母が松任市の駅前のお店で作った。柄なども母が選んでいたと思う。

l	50歳女性	1985年7月 (昭和60年)	恋愛	茨城県	白山市	作っていない	花嫁のれんの風習は知らない、 婚家からも何も言われなかった。	×	作っていない
m	36歳女性	2006年 (平成16年)	恋愛	金沢市 緑ヶ丘	白山市 徳光	作っていない	存在は知っている。海外での 挙式に憧れ、披露宴以外は身 内だけでハワイで行った。	くぐっていない。海 外での挙式後、金沢 のホテルで披露宴	作っていない
n	31歳女性	2010年 (平成22年)	恋愛	金沢市	白山市 上安田	兼六園の微 軫灯笼	母の花嫁のれんを使う予定 だったが、見当たらなかった。 加賀友禅のものですごく 綺麗だった。当日の事は緊張 であり覚えていないので、 どんな気持ちだったかなどは あまり覚えていない。高価な ものに用意して貰えて嬉しか った。	基本型、仏間ではな く、玄関の入口に花 嫁のれんをつるし た。	母が用意し た。
o	29歳女性	2014年6月 (平成26年)	恋愛	白山市 上安田	津幡	母の花嫁 のれんを用 いた、花輪 、トリ	親戚の結婚式で花嫁のれん の存在を知った。長女なので母 の物を譲りうけた。	披露宴の時、最初の 着物の時にくぐって 会場に入った。	母のもの



【図3】花嫁のれん宝来山

花嫁のれんは、生家の親が嫁ぐ娘を思い用意したものであった。一番普及したのは、すがきといって、直接描く加賀染めのものであった。これは手間がかからず、約1～2週間ほどで完成する。現在残る花嫁のれんの九割が、この加賀染めのものである。事例aの様に、加賀友禅を用いるのは稀であった。また、絵柄について調査では、様々な絵柄の花嫁のれんを見る事ができた。縁起が良く、目出たい模様が基本で、生家の親が娘にあったものを選ぶ。以下のものは、よく目にする柄である。

「薬王」：健康、長寿

「高砂」：友白髪、長生き

「松竹梅」：お目出たい植物の組み合わせ

「夫婦動物」：仲睦まじい、番の動物、おしどり、鶴、孔雀など

「宝船」：豊かな暮らし、財産に恵まれた人生、海に関した職業の人が好む

「楼阁山水」：豊かな自然のなかで立派な家に住んで欲しいという願い

特定風景：兼六園のことじ灯笼、故郷の風景
この他にも、多くの個性的な絵柄のものが作られている。

第二節 花嫁のれんの普及

花嫁のれんが婚姻儀礼の際に用いられるようになったのは、江戸幕末から明治の初期頃とされる。登場と共に、どこの家でも持参させていた。その登場には、仏壇や仏間の存在が大きく関係している。浄土真宗の強い信仰がある北陸三県、石川県、富山県、福井県では、必ず家に仏壇があった。北陸の仏壇は、他の地域の仏壇よりも大きく、豪華な造りのものが多い。一般的なものでも高さ180cm、横幅125cmほどある。

また、仏壇の種類も微妙に異なる。金沢の金沢仏壇は、金箔や蒔絵技術を取り入れた芸術性の高さが特徴である。仏壇製造の背景には、浄土真宗本願寺第八代法主、蓮如上人が文明3年(1471)に北陸布教に訪れたことが大きく影響したとされている。また、藩政時代(17世紀末)に入り、加賀三代藩主・前田利常が、美術工芸の奨励、振興を図るため京都や江戸から数多くの名工、職人を藩の細工所に集めたことが仏壇発展の基礎となる。七尾の七尾仏壇は、信仰心の厚い能登地方の宗教事情や、古くから祭りが盛んな土地柄であった事が大きく影響する。とくに祭りの象徴である

花嫁のれんと親族関係について



【図4】美川仏壇

神輿や奉燈は七尾でつくられており、神輿や奉燈には漆や彫刻、飾り金具といった技法が施されている。それはこの地方に古くから塗師、木地師、金具師、彫刻師などの職人がいたことを示しており、それらの人々が神社仏閣の建造や仏壇製造にかかわったことが、今日の七尾仏壇の基礎になったとされる。美川の美川仏壇は、おおよそ500年余りの歴史をもつ。室町時代、応仁の乱の頃に、戦乱を避けて京都から加賀の国に逃れてきた人々の中に、厨子の職人が多く含まれていたのが始まりとされる。また、寛政年間に名工と謳われた湊屋村次郎が、堆黒と漆絵という技法を考案し、美川仏壇は、一躍全国に広まった。

花嫁のれんが最も多く用いられたのは、団塊の世代を中心とした時代の結婚式である。この時代は、見合い結婚の最終世代であった。昔は隣町など「見えるところ」から嫁いで来る事が多く、他県など、遠方からやってくるという事はあまりありえなかった。団塊の世代以前の人には、「どこそこにおねえちゃんがいるから、あんた一回見合いしてみるか」などと世話をやく仲人が、あちらこちらにいた時代であった。特に呉服屋など、商売屋はだいたい仲人をする。客の性格や金銭面などは大体把握しているので、そういう仲人同士が先に調査し、「あそこの娘がこうゆう人探しとるんやわ」「じゃあ、あそこの人がいいぞ、次男さんやし」などと言って、結びつけるお見合い婚が団塊の世代であった。現在では、70歳近い方々がそういった結婚をした最後の世代であり、それ以降は、徐々にお見合い婚から恋愛婚へと移行していく。恋愛婚への移行は、結婚相手を求める範

囲を広域とし、遠方の相手との結びつきを増加させた。実際に遠方から七尾市へ嫁ぎ、花嫁のれんをめぐる問題が生じた女性の事例である。

【事例 f】：岩手県花巻から七尾市へ嫁いだ女性

「花嫁のれんを用意する様に、婚家側から言われた。花嫁のれんという風習がある事は知らなかった。その為、実家の母は、食堂にさげる様なレースののれんを用意した。姑からは、作り直す様に言われ、着物や花嫁道具以外にも高額なお金がかかり大変であった。」

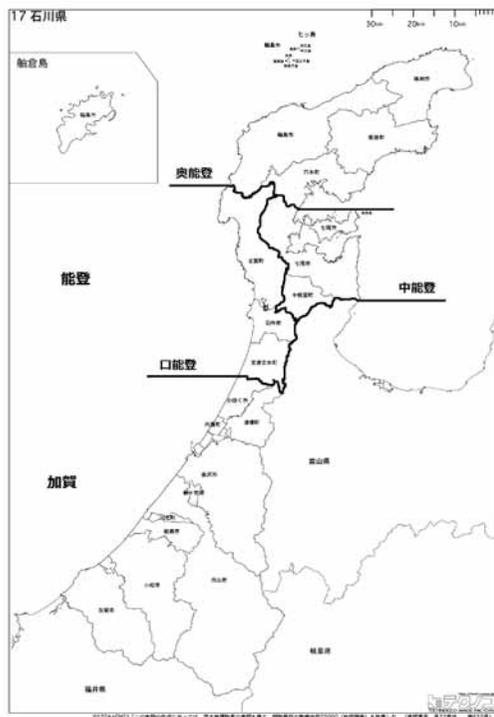
この様に、遠方の相手との結びつきには、生活習慣や風習に違を生じさせる。その為、花嫁のれんを用意すること、また仏壇参りをするとことが少なくなる。他から来た人に「あんたこっちは、花嫁のれんちゅうが作って、仏壇参りしてもわらんなんげんよ」と言わず、まるで腫物に触れるかのように、話にあがる事がなくなり、花嫁のれんは徐々に衰退していく。そして、今から約20年前の90年代頃に、花嫁のれんは廃れてしまう。団塊の世代の人たちの結婚が終わり、お見合い結婚から恋愛結婚になり、結婚相手を求める範囲が広域になればなるほど、花嫁のれんはみられなくなったのである。

第三節 花嫁のれんの分布

石川県は、日本海に突出し、南北に細長く伸びている。大きく分けると、北部の能登半島と、南部の加賀に分ける事ができる。更に、能登地方は、珠洲市、輪島市、能登町、穴水町からなる奥能登と、七尾市、中能登町からなる中能登、志賀町、羽咋市、宝達志水町からなる口能登の三つの地域に区分する事ができる。主に、奥能登を能登北部といい、中能登、口能登を能登中部という。中能登の属する七尾市一本杉通りでの聞き取り調査では、奥能登のお花嫁のれんの風習がみられない事が明らかになった。奥能登である珠洲市から、七尾市に嫁いできた女性の事例である。

【事例 d】：1975年（昭和50年）珠洲市から七尾市へ嫁いだ女性（当時60歳）

「珠洲では、ミチフサギという花嫁道中を妨害する風習はあったが、花嫁のれんの風習は聞いた事もなかった。その為、自分の結婚式では作らなかった。婚家側が用意する様に言ってくれていれ



【図5】石川県地区区分

ば、用意するつもりであった。嫁いでは、花嫁のれんが身近な存在となり、娘が結婚する際に

は作り、花嫁道具の一つとして持たせた。」

では、奥能登の婚姻儀礼は、その他の地域と全く異なった様式をみせるのだろうか。花嫁のれんをくぐる前後の儀礼の流れについて、地域ごとに聞き取り調査と、市史などの記述を基に、各地域の主な儀礼の流れを表にしたのが表3である。

奥能登とされる能都町、門前町には花嫁のれんの風習がみられない。しかし、仏壇や神棚参りをする風習は、どの地域でも同様に存在する。また、アワセミズという習俗はどの地域にも共通で存在する事が分かる。この様に、石川県内であっても一連の婚姻儀礼の中にみられる習俗が、存在したり、存在しなかったり、又は、名称が異なり存在する場合がある。

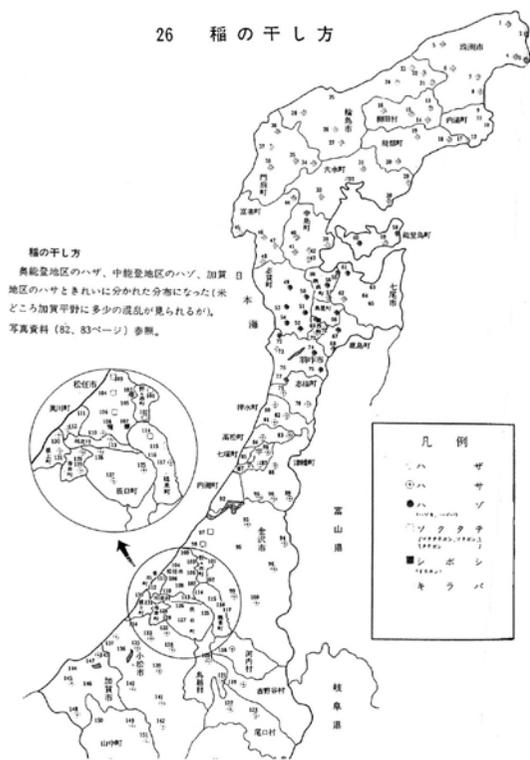
第四節 加賀・中能登と奥能登の民俗地域差

石川県内では、奥能登のみに、花嫁のれんの風習がみられない。では、何故、奥能登には花嫁のれんがみられないのか。その原因としては、民俗地域差の発生が考えられる。では、分布がみられない奥能登と能登中部（中能登、口能登）、加賀、にはどのような民俗地域差がみられるのだろうか。今回の調査では、花嫁のれん以外の婚姻習俗分布に違いを発見する事は出来なかった。しかし、田

【表3】婚姻儀礼の流れ

地域	迎え	妨害	水盃を飲む	盃を割る	餅つき	休憩	花嫁のれん	仏壇参り
柳田村	ムカエド	縄を張ったり、雪玉小石を投げる	※白装束で生家を出立 赤い着物で婚家へ		×	オチツキ膳	×	×
旧能都町 (能登町)	×	ナワハリ・シメナワハリ	婚家の水を飲むマネをする	付き添い人・仲人が盃を割る	水盃の際に盛んに餅をついている	×	×	仏壇に参る カキヤブリ
旧門前町 (輪島市)	ムカエド・チカムカエ	ナワハリ	アワセミズ (盃が上手く割れなかった場合仲人が拾い再度割る)		玄関先で餅をまく	オチツキ膳 (干鰯・黒豆) タライで足を洗う	×	仏壇と神棚に参る
旧中島町 (七尾市)	ムカエド ヘダシ膳	ツブシ・ツブシウチ・ナワバリ	ミズサカズキ		×	部屋に入り休む	花嫁のれんをくぐる	仏壇と神棚に参る
七尾市	ムカエド	ナワバリ	アワセミズ		×	×	花嫁のれんをくぐる	仏壇に参る
羽咋市	デダチブルマイ	×	アワセミズ		アシシロモチ	オチツキゼン	花嫁のれんをくぐる	仏壇に参る
金沢市	ムカエニヨウボ	×	アワセミズ		×	×	花嫁のれんをくぐる	仏壇に参る
旧松任市 (白山市)	×	×	アワセミズ		×	×	花嫁のれんをくぐる	仏壇に参る

【図6】 稲の干し方の名称分布



【図7】 田の神のまつりの分布



に関する習俗名称の分布に、特徴的な民俗地域差がみられた。

(1) 稲の干し方の名称(図6)

奥能登地区「ハザ」、中能登地区「ハソ」、加賀地区「ハソ」

(2) 田の神の祭り・アエノコトの存在(図7)

奥能登地区「あり」、中能登地区「なし」、加賀地区「なし」

この様に、異なる名称の分布がみられた。また、習俗名称以外にも、田の神の祭りである「アエノコト」の分布にも、民俗地域差がみられた。アエノコトとは、奥能登の存続する田の神の祭りである。その分布は、珠洲市、珠洲郡、輪島市、鳳至郡など、奥能登地域のみにもみられ、能登中部と加賀には全くみられない。このような田に関する習俗には、奥能登独自の文化の形成がみられる。その為、石川県内でも花嫁のれんの分布に、差が出たのではないかと考える。

第二章 通過儀礼の中の花嫁のれん

第一節 通過儀礼の中の結婚

A.V.ヘネップによれば、通過儀礼とは、一定の感情傾向と、一定の心理傾向に基づく特別なジャンルに属する行為であり、一方から他方へ、あるグループから他のグループへ移行する行為である。それは人生のひとつひとつの区切りに存在し、社会における特定の儀礼、又は洗礼、叙品式等にみられるのと同様で、特別な人生の時間である。ヘネップは、儀礼を、日常的連続に打ち込まれた非連続と述べている。その様な儀礼の目的は、個人を特定のステータスから、別のステータスへと通過させる事にある。

通過儀礼の中でも結婚は、ステータスの移行によって、社会的身分の変化が伴う重要なものである。結婚するという事は、幼年期あるいは青年期の社会から、大人の社会へあるいは、クラン⁽¹⁾から別のクラン、ある家族から別の家族へ、またしばしば、ある村から別の村へと移っていく事である。人間は生まれながらにして、或いは、成長

していく過程で様々な集団に属す。その為、結婚は、自由結婚の場合を除くと、あらゆる種の大小様々な集団が、二人の人間の結合に関係している。

(1) 二つの性別集団

(新郎新婦に付き添う青年男女、親類の男達と女達)

(2) 父系・母系の尊属

(3) 新郎新婦双方の尊属集団

(普通の意味での家族と広い意味での家族、親族全体を含む)

(4) 各種の結社

(トーテム⁽²⁾、クラン、友愛結社、年齢集団、信仰共同体、職業組合、カースト)

(5) 地縁集団

(郷、村落、街の一区域、大農園など)

この様な集団から一人の人間が抜ける、又は、加わると言う事は、数の上での、また経済的および、感情的弱体化を意味し、また一方の集団にとってはそれらの強化を意味する。強化される側は、なんらかの方法で、血縁関係や同民族、あるいは潜在的互惠性などの絆によって、彼らと結ばれている集団に対して、その弱体化の代償を提供する。結婚という新しい絆は、二人の人間を結びつけるだけではなく、何よりもまず、二つの集団を結びつけるものである。集団というものは、この絆の維持に執着する。その為、離婚の際には、引き離す為の特別な儀礼が必要となる。

第二節 境界状態と花嫁

通過儀礼は、一方から他方へ移行する際に発生する境界という観念によって、大きく三つに分類する事ができる。一つ目が、境界前に位置し行われる分離儀礼、これは葬儀などに多くみられる。二つ目が、境界線上に位置し行われる過渡儀礼、これは妊娠期間や、婚約期間などに多くみられる。最後に、境界後に位置し行われる統合儀礼で、これは結婚式に多くみられる。全ての儀礼がこの過程を具備し、その殆どが、無意識の間に経過している。この過程は、象徴的な死→儀礼的な隔離期間→象徴的な再生といった三つのレベルから成る。つまり、儀礼の過程を通過する者は、象徴的死から、生と死両方から離された状態に、一時的に留まる事によって再生される。これをヘネップ

は、繰り返されるコントラストの不連続性であるとしている。

婚姻儀礼においても境界は、「死と再生」の観念に基づき考察される。江守五男は、「葬礼への擬装によって悪霊の目をごまかし、新郎新婦を危険から防ごうとする呪的心理の到達点である。」(江守1982)と述べている。藤田稔は、「人の人生(誕生、結婚、死)は魂に関わる儀礼で、婚姻儀礼に死と再生の観念がみられるのは、花嫁の肉体とともに魂が移動するからである。」(藤田1985)と述べている。鈴木正崇は、「通常の生から死へという一方向の時間を死から生へと逆転する事で、非日常性、ハレを強調し認識させる役割がある。」(鈴木1998)と述べている。この様に従来の研究者、花嫁は生家を出る時に死し、婚家に入る時に再生されるといった捉え方が多い。

では、死から生の途中である境界上に存在する花嫁は、いったいどういった存在として認識されるのか。ヘネップは境界上に存在する者、又は、敷居などの上に居る者を、「境界状態」と定義し、「リミネール儀礼 (rites liminaires)」と呼んでいる。また、アメリカの文化人類学者であるV.W.ターナーは、「リミナリティ (liminality)」と呼んでいる。この様なリミナリティにある人間の属性は、非常に曖昧である。社会的地位や、文化的分離のネットワークから脱しているか、はみ出している。また、法や伝統、慣習などによって配置された位置の間のこちらにも、あちらにも、存在しない状態である。つまり、リミナリティに置かれた人間は、地位も職業も出自も取り除かれ、親族関係や家族の序列から除外され、役割や地位を示す事ができない。その為、受動的であり、謙虚であり、指導者に絶対服従し、命令に従い懲罰を受ける。しかし、この様な行為には、人生の次のステップへ適応させる為の力を授けるという重要な目的があると考えられる。

第三節 境界をくぐる・またぐ行為

境界の発生は、何らかの意味において、異質な空間などが接した時、内側である<我々の世界>・<聖なる空間>か、外側である<見えない何か>・<未知なる世界>のいずれか一方が、他方に向かい異質性を排除し、隔離し、疎外する事で発生す

花嫁のれんと親族関係について

る。その様な空間を人々は、「仕切る」「囲む」「境界づける」と言い空間を隔ててきた。また、その方法には3つの種類がある。一つ目が物理的仕切りで、これはAとB異なる空間を完全に隔てしまい、動かせない障害となる仕切りであり、万里の長城などがあげられる。二つ目が、認識的仕切りで、AとBが互いに連続しながらそれとなく空間を仕切る装置、あるいは印で、のれんや生垣、門、敷居、格子、手水鉢などがあげられる。三つ目が、空白の領域であり、連続した鳥居や寺社仏閣の参道、茶室の露地などがあげられる。この様に、仕切るという行為は、聖と俗、俗界と異界、此岸と彼岸、この世とあの世、未知と知といった空間の境目に結界を設ける事である。結界という概念は、密教寺院から始めた事からも分かるように、神秘性を高める儀式の一つである。結界は、物理的に確固たる障害ではなく、越えようと思えば、容易に越える事ができるものでなければならない。例えば、家々の敷地などの空間を分かち「垣」や、茶道における結界で、ここから先は立ち入り禁止を示す「関守石」・「留め石」、また、青竹を入口の門に斜めに渡し、入所拒否のサインである「青竹の結界」などが結界となり得る。結界としての機能において重要な事は、空間を心理面で分割しているが、視界を遮断してしまう物理的な障壁ではない事、また、下をくぐる、上を跨ぐ、間をする抜けることができ、両空間を仕切っているながらも、両空間をとりもち、交流させる事ができるものである。花嫁のれんは、リミナリティにある未知の存在の花嫁を、物理的仕切りのような障害で阻んでしまうのではなく、結界という認識的仕切りにおいて、聖なる空間である仏間に入れる為の装置として存在し得ると考えられる。

第四節 嫁入りの流れとその他の習俗（七尾市を事例に）

石川県の婚姻儀礼の流れについて調査した際に、生家をを出立し、婚家へ向かう間、どちらにも属さないリミナリティで、不安定な状態の花嫁を、生家から分離したり、婚家へ統合しようとする意味合いを持つのではないかと考えられる儀礼が多くみられた。以下に提示するものは、七尾市の一般的な婚姻儀礼の流れである。

①ツブシウチ（ミチフサギ）

生家をを出立し、嫁入りの一行が村境に入ったり、婚家に近づいたりすると、若い衆は道に縄や木材、ハシゴなどを並べたり、ツブテや雪玉などを投げて通行を妨害した。村の仲間入りの承認の意味を持つとされ、手荒い歓迎であった。

②チカムカエ

婚家側から二人、チカムカエが昼夜問わず、提灯を持つ花嫁を途中まで迎えにくる。一人は婚家への到着の連絡に走った。

③アワセミズ

婚家の敷居をまたぐ前に、銚子や竹筒に入れてきた実家と婚家の水を、盃の中で混ぜ合わせ花嫁が飲む。飲み終わると、盃を地面に叩き付け割る。



【図8】アワセミズの様子



【図9】割られた盃

④オチツキ餅

上流の家では、花嫁が婚家に到着すると、準備しておいた餅をつき始める。

⑤花嫁のれん

花嫁は手引きの子供に引かれ、仏間の入口に掛

けられた花嫁のれんをくぐる。のれんは、ミツメ
辺りまで掛けられる。その後は、建前や法事、葬
式等のトキシキに掛けられる場合もあるが、ほと
んどは、タンスの奥にしまったままで、出さない
事の方が多い。

⑥ 仏壇参り

のれんをくぐった後、仏間に入って一休みして
から、白い打ち掛けを着て、姑の案内で仏壇に参
詣し、嫁入りの報告をする。また里から持参した
蠟燭や、線香を供える。

⑦ せんべい配り

嫁入りを見に来た在所の人々に、せんべいを配
る。

その後、披露宴や挨拶まわりが行われる。

【表4 石川県にみられる習俗】

習俗	場所	人	動作
ツブシウチ	婚家の村境	花嫁・婚家側 の若者	縄を張られたり、石を投げ られる
チカムカエ	婚家へ向かう 道中	花嫁・婚家側 の親戚	花嫁を迎えに 行く
アワセミズ	婚家の玄関、 敷居の前	花嫁	婚家と生家の 水を飲む
花嫁のれん	仏間の入口	花嫁	のれんをくぐ る
仏壇参り	仏間	花嫁・姑	仏壇に参る

七尾市の婚姻儀礼にみられる一連の習俗の中で



【図10】 ツブシウチの分布

も、花嫁のれんと同様に、境界と関連して行われ
ていると考えられる特徴的な習俗①ツブシウチ、
②アワセミズを取り上げ、その行為が持つ儀礼的
の意味を、国内の事例だけでは理解しがたい点があ
る為、諸外国の事例も取り上げ考察する。

① ツブシウチ

ツブシウチは、花嫁道中の際に、花嫁に石を投
げたり、縄などを張ったりして道中を妨害する行
為である。しかし、花嫁を歓迎する意味があるとい
う。婚姻儀礼における妨害行為は、図10の分
布に分かる様に、中部地方から中国地方にかけて
みられる。(図10)

妨害の方法には様々あり、金沢市近郊では、「カ
キ」といって実際に垣を造る。河北郡の森本村で
は、道路に大石小石を並べ妨害、同郡の大根布で
は、昔は往来に舟を横たえたり、あるいは糞便を
撒いたりする。石川郡吉野谷では、道路上に火を
焚かれる。羽咋郡志雄町字吉野屋では、若者が祭
太鼓を裏庭まで持ち出し、盛んに打ち鳴らして振
舞いを強請する。同郡の中甘田村では、若者が空
の酒樽に、縄をつけて婚礼の座敷に投げ込み酒を
乞う。珠洲郡西海村では、藁苞に縄をつけて投げ
入れ、頭付きの魚などを貰った。など、石川県内
だけでも様々な妨害行為がみられる。妨害行為の
中でも、ツブテや雪玉（その他、干大根、藁束、
松の実、泥、また水をかける事もあった。）を投
げるツブシウチは、能登、加賀、越中に広く分布
している。

石を投げるという行為は古くからあり、江戸時
代（文政13年）の喜多村信節による『嬉遊笑覧』
には、祝儀にツブテが飛ぶ事が書かれている。そ
して、近代に入ってもなお根強く残存している。
加賀藩でも、「婚礼之時分礮打申儀堅不仕様」と
いった禁令が出されている。というのも、若者の
間でツブシウチの様な、モノを投げる行為が、平
生の反目抗争のうつぶんばらいや、嫌がらせとし
て意味を変えてしまったからであり、大正から昭
和初期の『能登諸郡誌』の記述によれば、蛮行視
する風潮が強い。

ヨーロッパでもモノを投げる習俗がみられる。
ポーランドでは、新郎新婦に雪や、通りにあるお
がくず、食べ物のカスから、花吹雪の起源である
と考えられる紙切れなどが投げつけられた。これ

花嫁のれんと親族関係について

は、多産を願う呪術的風習として考えられ、アングロ・サクソン系の国々で多くみられる。また、秋田県など北部地方の田植えの際の習俗には、身分のあるもの、卑しいものの区別なく、田の中の道を行き交う人には、祝うと言って、泥苗を投げつける風習がある。この様に、モノを人に向けて投げるといふ事には、戦闘、防衛、狩猟、撃退、刑罰、凌辱以外にも、呪術的、儀礼的意味も含まれる。特に婚姻儀礼の中にみられるツブシウチの習俗は、生家と婚家の境界で行われる事から、花嫁が、婚家側の者になる為に乗り越えなければならない一つの試練であり、婚家と花嫁の統合の儀礼であると考えられる。

②アワセミズ

花嫁が婚家に入る際に、婚家の水を飲ませる習俗は、東北や関東、北陸の各地方で見られる。宮城県宮城郡七ヶ浜町では、婚家の台所へ入る際、花嫁に一升ますの中にある茶碗の水を飲ませる。群馬県前橋市総社町では、花嫁は庭火を跨いで婚家に入る他に、「侍女房の案内で姑と水盃を交わす」慣わしがある。埼玉県比企郡小川町では、花嫁は婚家のトボグチで片足をたらいに踏み入れ、姑とトウボ盃を交わす。富山県下新川郡入善町上野では、茶碗割りといって、花嫁が婚家の入口で水を飲む。など、各地で様々な事例がある。

水という物質は、宗教や儀礼と密接に結び付き、様々なイメージや象徴的意味を持ち得る。オランダの神話学者であるヤン・デ・フリースは、水のイメージをこの様に捉えている。

- (1) 混沌：水は全ての物質の起源であり、生命を与える。
- (2) 洗礼：再生、新生をもたらす。
- (3) 推移：気体と個体、あるいは生と死の間をあらわす。
- (4) 溶解：あらゆる物質は、水の中で溶解する。
- (5) 浄化：ケガレを浄める。

これらの各順の順序や優劣は、地域、時代によって変化はあるが、我々のもつ水のイメージはほぼ含まれる。また、ルーマニアの宗教学者であるエリアーデは、宗教学概論の中の水のシンボリズムについて、「水は形を解体し、破棄し、罪を洗い清める。また清めると同時に再生させる。」とし、いかなる宗教的枠組みにおいても、水の持つ機能

は常に同じであると考察される。

インド密教の加入儀礼であるアビシューカでも、水が用いられる。アビシューカは、いくつものプロセスから成る複合的儀礼だが、「abhi√sic」＝「水を注ぐ」という動詞から派生した語である事から分かる様に、その中核とされるのは、弟子が師から水瓶の水を注がれる部分にある。この様な洗礼をはじめ、入門者に水を注ぐ儀式は、水の持つ浄化と再生といった機能に根ざしており、最も一般的なものと考えられる。

結婚式といった場でも水は、儀式の重要な装置の1つであった。特に、婿方の水を飲む事は、共食の第一歩として考えられる。『古事記』には、八千矛神が須勢理媛と唱和し、男神が女神の首あたりに後ろから手をかけて、ひとつの盃から二神が共に酒を飲む、やがて婚礼の儀式である、三々九度の固め盃へ発展するといわれている。つまり、婚家の食物を共食する事は、オチツキ餅や親子盃、高盛飯などと同様に家族および、同族化を表すものと考えられる。

第三章 花嫁のれんと親族関係

第一節 婚入者と家

直系家族制において婚入者は、「妻」としてよりもまず、「嫁」として構造化し家へと取り込まれる。家の中の権威構造の中では、「妻」という同一地位の者たちを、地位間の関係性を明示する「嫁」と「姑」としてカテゴライズされる。そして、「家」を保持する為に、構造化された権威および、勢力の配分において、「嫁」は通常相対的にもっとも低い地位に置かれる。この様な婚入者の地位は、親役割の取得や、夫の家長就任に伴う地位の変更、新たな婚入者の組織加入での姑役割の取得によって上昇する。

第二節 七尾市での事例

七尾市一本杉通り商店街では、表1の方々を対象に嫁姑関係についての聞き取りを行った。ここでは、七尾市の嫁姑関係が実際どのようなものであったのか、という事が分かると考えられる事例をあげたい。

【事例 b】：1961年（昭和23年）金沢から中能登

町へ嫁いだ女性

「花嫁のれんのドラマの様に、姑が極端に厳しいという事はなかった。しかし他人同士と一緒に生活するのでいろいろとあった。家事については、姑がほぼやってくれていた。しかし、姑が骨折してからは、家事や姑身の周りの世話を手伝う様になった。」

【事例 c.】：1969 年（昭和 44 年）七尾市内で結婚した女性（当時 65 歳）

「姑は厳しい人で、姑の言う事に否定せずいいなりで、聞き従わなければならない時代だった。蔵には入れなかった。（女性は入れない決まりがあった。）」

【事例 e.】：1977 年（昭和 52 年）七尾市内で結婚した女性（当時 61 歳）

「婚家の呉服屋で姑と一緒に働いているが、同居はしていない。姑はあっさりした人で、仕事で少しケンカをしても、次の日には忘れているといった関係」

七尾市史の記述によれば、「ヨメは、藁八束担ぐまで、フルヤの難題」といわれるとある。藁八束というのは、火葬の際に必要な藁の事であり、フルヤとは、嫁の実家の事を示し、死ぬまで実家の厄介になるという意味である。嫁いでもなお、実家との繋がりが濃い地域であった。婚家での嫁の地位は非常に低いものとされており、「ヨメの座とこあ、どこにある。ヨメヤ、猫のカシラや。キバラの隅にすわっとれ」などと言われ、婚家での嫁は、イロリのシモジャ⁽³⁾ や、キバラ⁽⁴⁾ のすま⁽⁵⁾ などの家の中でも、地位の低い者が置かれる位置に置かれた。また、嫁はハンガイワタシ（シャモジワタシ、シヨタイワタシ）といわれる主婦権の譲渡が済むまでは、漬け物を上げるのも、米びつに触れるのも、蔵に入るのも姑の許可や命令がなければできなかった。嫁入り道具のタンスや、長持ちもすぐには蔵に入れてもらえず、婚家で落ち着くものと見極められて初めて蔵へ入れた。その時点で、蔵への出入りを許可されたという地域もある。しかしながら、どの地域でも嫁は姑には逆らえなかった。

第三節 白山市での事例

七尾市での聞き取り同様に、表 2 の白山市上安

田町周辺の方々にも嫁姑関係について聞き取りを行った。ここではその聞き取りを事例としてあげる。

【事例 k.】：1977 年（昭和 52 年）白山市内で結婚した女性（当時 53 歳）

「実家の自営業を手伝い、家をあけている事が多かったが、姑は何も言わない。子供の面倒をよく見てくれていたので助かった。」

【事例 l.】：1985 年（昭和 60 年）茨城から白山市へ嫁いだ女性（当時 50 歳）

「同居はしていない。正月や盆以外には、姑とあまりあまり顔を合わせない。仲が悪いという訳ではなく、どこにでもある嫁姑関係だと思う。」

【事例 n.】：2010 年（平成 22 年）金沢市から白山市へ嫁いだ女性（当時 31 歳）

「一緒に住んでいないが、家が近いのでよく援助してもらう。子供の躰には厳しい人だと思う。」

【事例 o.】：2014 年（平成 26 年）白山市から津幡へ嫁いだ女性（当時 29 歳）

「家が遠いので、あまり顔を合わせないが、とっても優しい姑だと思う。子どもが生まれた時には、実家の母よりも心配してくれいろいろとお世話になった。」

石川県には能登地方の男性の特徴を表す言葉として「能登のとと楽（ととらく）」、それに対応する言葉として「加賀のかか楽（かからく）」という言葉がある。これは二つの地域の特徴を表した言葉で、能登地方では女性がよく働き夫は楽をし、反対に金沢を中心とした武家社会だった加賀地方では、夫がよく働き妻が楽をするといった意味がある。このことから、加賀地方に属する白山市では、女性に対してそれほど厳しくなかったのではないかと考える。

第四節 持参財としての花嫁のれん

儀礼の中での花嫁のれんは、婚家の仏間の得体のしれない存在である花嫁を入れる為の装置、あるいは結界であると考えられる。しかし、生家側が用意するという事から、持参財としても成り得るのではないだろうか。

花嫁が生家から持参する財について、最も厳しい地域が、南インドのナガラッタール・カーストである。このカースト間に流通する花嫁持参財が

花嫁のれんと親族関係について

シール・ダナム（ダウリー）である。以下は持参財殺人事件についての新聞記事である。

「ニューデリーに住む税理士、マニシュ・チャンドリアさん（26）は、自分の目の前で起きたその出来事が今でも信じられない。5年越しの恋を实らせた妹のムクタさん（23）を、婚約者の男性（26）が拳銃の前日に5階建て自宅アパートの屋上から突き落として死なせたのだ。…略…原因は、結婚時に女性が嫁ぎ先へ金品を納めるヒンズー教の「ダウリー」（持参財）だ。4月28日深夜にチャンドリアさん宅を訪ねた婚約者とその母親は、マニシュさんが贈った家具類が「安すぎる」と文句を付け、「事業を興す資金にする」と言って50万ルピー（約130万円）の現金を要求してきた。婚約者側の強欲ぶりに憤慨したムクタさんは「もう結婚したくない」と言って屋上に駆け上がった。後を追ってきた婚約者の手で若い命を散らせた。婚約者とその母親は、殺人と持参財強要の容疑で逮捕された。」（読売新聞2007年5月）とある。1961年に持参財禁止法が導入されたが、中流家庭では、電化製品や家具、衣類を持参財として手に入れようとする者が増え、2006年には持参財をめぐる殺人や自殺が7618件にも及んだ。

もともと南インドでは、「花嫁の生家が花婿に渡す財産」という意味での、財産金を意味する現地語は存在しない。花嫁の持参財は、女性自身に属する財産であると考えられている。一般的に女性の財産は、結婚の折にまとめて生家から与えられる。しかし、その後も生家から贈られるもの全て、女性が受け取る権利のある財産とされている。この様に、結婚した女性に託された財産は、主に女系を通じて相続されていく。この様な女性の財産は、一般的に男性の財産が、不動産の農地であったり、家であるのに対して、動産であるという特徴がある。そのほとんどの財産が、現金や宝飾類、衣類、その他家財道具類といった形で与えられる。これは、伝統的には、女性の許可なくして婚家の人間が、手を触れる事ができず、離婚する場合は、彼女が持ち帰る事ができるとされている。シール・ダナムは元来、女性の結婚後の経済的な自律性を保証するものであった。

前資本主義的な経済では、婚姻によって移動する女性自身も、彼女によって運ばれる財も、共に

交換者から切り離せる「財産」ではなく、切り離される事のない「富」として考える。ナガラッター女性女性の結婚では、生家との繋がりを強力にするシール・ダナムによって妻としての地位、女性としての地位が確立され、より高い地位を保つ事ができるのである。その為、生家との繋がりが希薄になるにつれて、女性の地位は低いものとなり、ひどい場合は、虐待や、殺人へと繋がるのである。

七尾市や白山市も結婚後も花嫁と生家の繋がりが強い地域であった。生家は花嫁の沢山の花嫁道具を持たせ、結婚後も何かと婚家へ贈り物を送る。特に昔は出産の際は、生家の里帰りする風習があったが、その際には、子供の服からオムツ類を生家が用意をした。それは全て花嫁側の財である。花嫁のれんも、その様な財の中に含まれるのではなだろうか。

【事例j】：1962年（昭和37年）白山市内で結婚した女性（当時78歳）

「花嫁のれんという高価な物を持って行く事によって、金銭面的に婚家と対等である事の証明、実家の婚家へ対する見栄。」

花嫁のれんを親に作ってもらった方は皆、花嫁のれんがどれほど高価なものであるか理解しており、戦後すぐの物不足であった時代に結婚した方は、実家の負担になるので、花嫁のれんは作らないでいいと親に言ったそうだ。実際、花嫁のれんを一つ作ろうとすれば、かなりの金額がかかる。花嫁のれんを扱っている呉服店によれば、加賀染めのもので安くて12万円、高額なものになると15万円、更に、加賀友禅のものになると、安くて33万円、高額なものになると48万円ほどかかるという。ほとんどの場合が一生に一度しか使用せず、タンスにしまってしまうものである。しかし、これほどまでに値段の張るものを、生家の親が花嫁に持たせるという事は、婚家側での花嫁の地位を低くさせない為のもので、花嫁の財となるものという考えからなのではないだろうか。

第四章 花嫁のれんの変容

第一節 儀礼文化と変容

儀礼文化を調査する過程で、大きな変容をみせる時期があった。それが高度経済成長以降である。

高度経済成長期は、日本社会の日常生活の様相を一変させた。そして、その様な変化は、単に物的な面だけではない。日本に長く培われてきた伝統的な生活様式をも一変させた。この新しい変容は、日本人の心と体、全側面に及んでいる。高度経済成長は、日本人の生活、文化が大きく変化する境目であった。

その様な変化は何故生じたのか、婚姻儀礼においては、二つの事柄があげられる。まず、一つ目が、家の間取りの変化である。これは、農林省の生活改善課による生活改善普及事業での、モダンで合理的な生活を推奨したもので、石油、ガス、電気、水道の利用普及から、土間から板の間への変化、都会風の台所の普及、座椅子の食卓の増加などがあげられる。この様な生活空間の変化は、囲炉裏をめぐる民俗の消滅、水神信仰の薄れ、神棚や仏壇が祀られにくくなる、といった人々の生活の中の信仰を薄れさせる要因となった。そして二つ目が、公民館活動での結婚式の簡素化である。これにより、結婚式にまつわる多様な呪術的儀礼が消滅していく。婚姻儀礼は通過儀礼において、最も変化が激しいものとしてあげられる。例えば、嫁の入室儀礼が消滅したり、出家儀礼や、引き移り儀礼が簡略化されたりする。これらの理由としては、婚姻儀礼の主たる場が、男女双方の自宅から、公民館やホテルなどの外へと、家から外への動きが要因として考えられる。

また、これら二つの事柄以外にも、精神面での成人意識の曖昧さが儀礼文化に変化を与えた。伝統的儀礼の中での結婚は、社会的に一人前になる事が大前提であり、成人式を通過していないと認められなかった。しかし、成人の意味が徐々に曖昧となり、新成人の意識に関するネット調査では、二十歳の自分を大人だと思っているという回答が、75.5%を占めているという。この事が結婚式の意味に変化を生じさせた。

更に、結婚式自体も大きく変化している。その大きな要因が、神前式の普及であった。神前式の結婚は、明治時代に始まり、高度経済成長期に一般化する。当時の7～8割が神前結婚であった。そして、昭和30年代頃が神前結婚の隆盛の時代であり、それまで神社や仏閣で行われていた神前結婚式が、ホテルや結婚式場で行われる様になっ

ていく。結果的には、神前式の普及が、挙式を家や地域社会から分離させる事になった。その後、結婚式は、昭和50年代頃より、チャペルでの挙式の増加や、海外での挙式の増加、ウエディングドレス、ヴァージンロードに憧れる若者の増加により、教会式へと移行していく。もともと家や地域社会内で行われていた神前式の、「伝統」「家」や「忍耐」のイメージに対して、チャペルウエディングは、「新しい」「個人」「解放」のイメージであり、家や地域ではなく、個人を追求する文化の象徴であるとされる。この様に儀礼文化は、集団を基盤としていたものから、個人や狭い集団としての家族に移行する事によって、実施されない事も含め、多様化を示し、現在に存在している。

第二節 一本杉に残る花嫁のれん

全国的に婚姻儀礼の変化をみてみれば、高度経済成長期以降を境に、自由なイメージのチャペルウエディングへと、新しさや、個人の尊重を求め変化している。しかし、これはあくまで全国の平均的な変化である。その為、全てがチャペルウエディングへと変化し、伝統的儀礼が姿を消してしまったという訳ではないと考える。七尾市一本杉でも、伝統的婚姻儀礼は残っていた。花嫁のれんもその一つである。ちょうどチャペルウエディングが、流行する高度経済成長の少し後に、七尾市で恋愛結婚をした女性の事例である。

【事例 e.】：1977年（昭和52年）七尾市内で結婚した女性（当時61歳）

「婚家が呉服店を営んでいた為、実家の親が婚家に頼み込んで花嫁のれんを作った。自ら口出しはしなかった。」

この方の婚家は、古くからつづく呉服店を営んでおり、婚家の家業を無視して、花嫁のれんを用いない婚礼を行えば、その後の婚家で娘の立場があまり良くないものになるのではないかと、生家の親が思い、花嫁のれんを婚家に注文したのではないだろうか。また、婚家も生家も七尾市であった為、花嫁のれんの風習は両家ともに知っていた。そうやって両家の花嫁のれんに対する理解が、花嫁のれんを用いる有無に関係するのではないだろうか。この事から、家柄や職業、婚家と生家の地域、特に、花嫁のれんの風習が濃く残る七尾市一

花嫁のれんと親族関係について

本杉では、今でも、「伝統」「家」「忍耐」という伝統的な、婚姻儀礼のイメージが、根強く残っているのではないかと考える。

とはいえ、花嫁のれんは衰退してしまう時期もあった。聞き取り調査では、平成の初め頃（90年代頃）花嫁のれんがあまりみられなくなったという。一本杉にある呉服店の方にお話を伺った際も、90年代頃から、花嫁のれんの注文が、急激に減少したという。

その原因は、交通網の発展や、情報通信の発達によるものであると考えられる。今まで、隣町や隣村などの近隣での、狭い結婚があたりまえであったところに、遠方の人たちとの交流をする手段が増えた事によって、出会いも自由となり、七尾市あるいは石川県から外へ嫁いでいく結婚が増したり、外へ出て行く場合は、婚家方の地域に仏壇参りの風習がなかったり、あるいは、仏壇や仏間がない場合、花嫁のれんは必要ない。また、花嫁のれんの風習がなく、花嫁のれんを知らない地域の人間に、高価なものなので、無理やり作らせない。その結果、徐々に花嫁のれんは衰退していったのだと考える。

第三節 イベント化する花嫁のれん

七尾市一本杉通りでも、一度は衰退してしまった花嫁のれんであったが、町おこしの一環として、2004年（平成16年）に行われた、第一回花嫁のれん展が成功を収め、花嫁のれんの存在が再び注目されるようになった。花嫁のれん展とは、4月29日の昭和の日から母の日にかけて、一本杉通り商店街で行われるイベントである。2004年（平成16年）から毎年行われており、450mほどの商家や民家に、150枚以上の花嫁のれんが、期間中展示される。また、商店街の方々により語り部も存在し、それぞれ一枚一枚の布にまつわる思い出や、エピソードが披露される。現在まで続いており、2016年（平成28年）に第一三回花嫁のれん展が開催予定である。

このような商店街の方々による活動により、今まで、タンスの奥に仕舞い込んでいた多くの花嫁のれんが、再度注目され、テレビドラマ「花嫁のれん」が制作される切っ掛けとなった。ドラマ「花嫁の

れん」は、2010年（平成22年）に東海テレビ制作放送のドラマである。2ヵ月間フジテレビ系列で全国放送された。ドラマの中では、「花嫁のれんをくぐらずに結婚した女性は、えんじょもの（よそ者）として嫁とは認めない。」とする強固な姿勢の姑、志乃（野際陽子）と、東京から金沢に嫁いできたキャリアウーマンの嫁、奈緒子（羽田美智子）の壮絶な嫁姑バトルが、コメディタッチで描かれている。このドラマの物語の舞台となったのは、石川県金沢市の老舗旅館であった。しかし、花嫁のれんを題材にするのであれば、一本杉通りは外す事は出来ないという意見により、一本杉でもロケが行われた。第1シリーズの放送が好評であった為、2011年（平成23年）には、第2シリーズが放送され、更に、2014年（平成26年）には第3シリーズ、翌年、2015年（平成27年）には、北陸新幹線の開業を祝して、第4シリーズが放送された。これらの、町おこしとして行われた花嫁のれん展や、ドラマ「花嫁のれん」が、今日に復活した花嫁のれんに、大きな影響を与えたのではないかと考えられる。

花嫁のれん展や、ドラマを通し復活した花嫁の



【図11】花嫁のれん展フライヤー

れんは、現在どの様に用いられているのか。次に取り上げる事例は、花嫁のれん展が開始された以降のものである。

【事例 f】：2011 年（平成 23 年）七尾市から大阪へ嫁いだ女性（当時 40 歳代）

「家紋だけ友禅染で、着物など思い出の品を使って母が手作りしてくれたもの。大阪では仏壇参りがないので、実家の仏壇へ手を合わせてのれんをくぐった。」

【事例 i】：金沢市から七尾市に嫁いだ女性（当時 30 歳代）

「加賀友禅のデザインの仕事をしており、婚家も呉服屋であった為、作って欲しいと言われ、自らデザインし染めた花嫁のれんをくぐった。」

現在の七尾市では、生家の親が全て決めてしまうという、昔のスタイルではなく、家や親の意思だけではなく、花嫁自らの意思で花嫁のれんを用いた婚姻を選び、伝統的要素も残しつつも、オリジナルな要素も取り入れ、「新しさ」を追求しながら存在しているのではないだろうか。一方で、花嫁のれん展やドラマは、花嫁のれんを観光誘致アイテムのひとつとして変化させ、イベントとして用いられる事が多くなったのではないだろうか。もともとの花嫁のれんは、婚家の玄関で合わせ水、仏間の入口に掛けられた生家から持参した花嫁のれんをくぐり、婚家の仏壇へ挨拶をするといった儀礼の流れの中に存在した。しかし今日、花嫁のれんは仏間の入口以外にも掛けられる様になった。

【事例 o】：2014 年（平成 26 年）白山市から津幡市へ嫁いだ女性（当時 29 歳）

「ホテルで披露宴を行った際に、その披露宴会場の入口にかけ、入場する際に新郎と共にくぐった。」

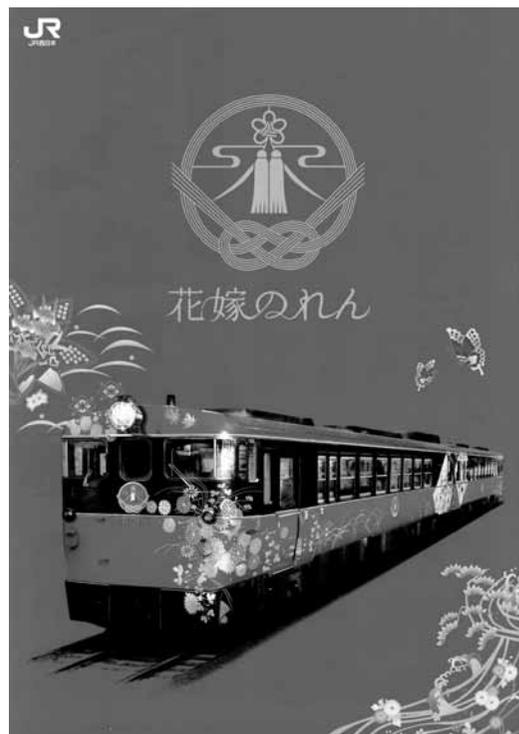
本来、神聖な仏間への境界として用いられていた花嫁のれんが、家の間取りの変化や、会場の多様化に伴い、仏間の入口以外にも掛けられ、用いられる様になった。そうなると本来、花嫁のれんが持つ機能は失われ、通過儀礼というよりも、結婚式におけるのれんをくぐるパフォーマンス、イベントとして用いられているのではないだろうか。実際にイベントとして、花嫁のれんくぐりを行っているのが、一本杉通り商店街で行われてい

る花嫁道中である。花嫁のれん展の初日に行われ、商店街の仙対橋から、端の御祓公民館まで新郎新婦と、青年会から婦人会の者たちが歩く。途中の花嫁のれん館に掛けられた花嫁のれんをくぐり、仏壇にあいさつするというイベントである。参加する夫婦は、本物の新郎新婦で、その年に結婚式を挙げた者という条件がある。

現代的花嫁のれんの普及は、のれん展やドラマの影響が大きい。地域社会や家と、密接に関係しあっていた基本的スタイルの花嫁のれんくぐりが、完全になくなってしまった訳ではないが、通過儀礼というよりも、ひとつのイベントとして、または、綺麗な北陸の伝統品として、用いられているのではないだろうか。イベント化、伝統品化する事で、嫁姑といった人間関係とは、切り離されて存在するのではないだろうか。

終わりに

花嫁のれんは、加賀染めの美しいのれんという「モノ」として、また、通過儀礼の中の仏間への「結界」として、更には、親の思いが込められた



【図 12】花嫁のれん号

花嫁のれんと親族関係について

花嫁の「財」として、三つの面から捉え考察する事ができた。昔はそういった三つの面、全てを含んで花嫁のれんであった訳だが、現在、美しいのれんとしての注目が大きい様に感じる。最近、北陸新幹線の開通にともない、JR西日本が、金沢から和倉温泉駅間に「花嫁のれん号」という観光列車を導入した。北陸の伝統工芸である輪島塗や加賀友禅、金箔などをあしらった内装も外装もとても豪華な列車である。名前だけではあるが、この様な場所でも花嫁のれんが使われている。花嫁のれんは、北陸の観光客誘致の為に、重要なアイテムとされながらもこれからも大切にされていくだろう。しかし、通過儀礼という側面を失われずに、これからも北陸の伝統的花嫁道具のひとつとして、未来へと受け継がれていく事を願う。

注

- (1) クラン：氏族。一族。
- (2) トーテム：ある血縁集団と特別な関係を持つ特定の動植物や自然現象。
- (3) シモジャ：囲炉裏の周囲の座席名、子供、女、下女、下男、奉公人が座る。
- (4) キバラ：薪の納屋。かまど近くに置かれた薪置き場。
- (5) すま：隅に同じ。

引用文献

1. 江守五夫 (1982) 「婚礼の際の悪霊と呪的習俗 - 日本婚姻儀礼論 (1) / 有斐閣 / P37 ~ 43
 2. 鈴木正崇 (1998) 「通過儀礼」 / 『講座日本の民俗学 6 時間の民俗』 / P205 ~ 234
 3. 藤田稔 (1985) 「人の一生と生と死と再生」 / 『茨城の民俗』 / P1 ~ 12
- 参考文献
1. 青木保 (1984) 『儀礼の象徴性』 / 岩波書店
 2. 赤坂憲雄 (1989) 『境界の発生』 / 砂子屋書房
 3. 天野武 (2001) 『都道府県別 日本の民俗分布地図集成 第6巻』 / 東洋書林
 4. 綾部恒雄・綾部裕子訳 (1997) 『通過儀礼』 / 弘文堂
 5. 石上堅 (1981) 『生と死の民俗』 / 桜楓社
 6. 今村充夫 (1978) 『生きている民俗探訪 石川』

/ 第一法規

7. 小倉学 (1974) 『日本の民俗 石川』 / 第一法規
8. 金沢市史編さん委員会 (2001) 『金沢市史・資料編 14 民俗』
9. 田中真砂子・大口勇次郎・奥山恭子 (2003) 『縁組と女性 - 家と家のはざままで - 』 / 早稲田大学出版部
10. 中沢厚 (1981) 『ものと人間の文化史 44・つぶて』 / 法政大学出版局
11. 中島町史編さん専門委員会 (1995) 『中島町史・資料編上』 / 中島町役場
12. 長岡博男 (1975) 『加賀能登の生活と民俗』 / 慶友社
13. 七尾商工会議所 (2009) 『出会いの一本杉』
14. 能都町史編集専門委員会 (1980) 『能都町史第一巻』 / 石川県能都町役場
15. 文化出版局 (2005) 『季刊銀花』
16. 門前町史編さん専門委員会 (2004) 『新修門前町史・資料編 6 民俗』
17. 柳田村史編さん委員会 (1975) 『柳田村史』 / 石川県鳳至郡柳田村役場
18. 石井研士 「現代日本における儀礼文化の持続と変容の理解に向けて」
19. 伊藤信博 「穢れと結界に関する一考察「ケガレ」と「ケ」」 / 言語文化論集第一号
20. 小野寺綾 (2004) 「婚姻儀礼における擬死再生のモチーフ - 徳島県那賀郡木頭村の事例より - 」
21. 金本拓士 「女人結界の意味するもの」 / 現代密教第7号
22. 北端信彦 (1993) 「『暖簾』 その意と匠」 / 塚本学院教育研究報告論文
23. 高嶋めぐみ (2009) 「婚姻儀礼にみる「火」と「水」」 / 苫小牧駒澤大学紀要第21号
24. 西村祐子 (1994) 「投資としての花嫁持参財 - 南インド・ナガラタール・カーストの婚姻 - 」 / 民俗学研究
25. 松本勝邦 (1997) 「日本の境界に於ける空間諸相の研究」 / 明治大学科学技術研究所紀要 36
26. 森雅秀 (1990) 「インド密教儀礼における水」 / 国立民族学博物館研究報告 15 巻 4 号

図版出典

図 1：著者の祖母撮影

図 2：七尾市一本杉通り HP (http://ipponsugi.org/img/street_map.gif) より

図 3：著者撮影

図 4：著者撮影

図 5：白地図テクノコ (http://technocco.jp/n_map/on_data/base_off.gif)
に著者が加筆したもの

図 6、7：天野武（2001）『都道府県別日本の民俗
分布地図集成 6 巻』 / 東洋書林より

図 8：著者の祖母撮影

図 9：著者の祖母撮影

図 10：中沢厚（1981）『ものと人間の文化史 44・
つぶて』 / 法政大学出版社より

図 11：七尾市一本杉通り HP (http://ipponsugi.org/img/street_map.gif) より

図 12：花嫁のれん号パンフレットより

表 1：著者作成

表 2：著者作成

表 3：著者作成

表 4：著者作成